Ｎｏ．１１７【２０１４年７月２５日配信】
青森町の海岸部の開発（担当：工藤）

こんにちは！室長の工藤です。

連休最終日となった 7 月 21 日は「海の日」でした。かつては 7 月 20 日が「海の記念日」で、聖徳（せいとく）公園には「海の記念日発祥の地」の碑があり、青森ともゆかりのある記念日でした（平成 24 年 7 月 13 日配信のメールマガジンも併せてご覧ください）。

さて、「青森」という「まち（ここでは、おおむね中心市街地をイメージしてください）」が誕生してもうすぐ 400 年を迎えます。つまり、青森は、さまざまな歴史景観を 400 年という長い時間のなかに刻み現在に至っているといえるでしょう。今回は、青森の景観が大きく変貌を遂げ、それはある意味では現在も続いている…そんな話題です。

明治 4 年（1871）に県庁が青森町に移転し、「県都青森」が誕生します。その少し前、明治 2 年の末から明治 3 年にかけて、青森町の海岸部の開発が企図されます。これには、隣接する浜町（現在の安方 2 丁目の一部と本町 2 丁目･5 丁目の北側の区画）の住民、とくに、仕事に直接の影響が出るとみられる廻船問屋を営んでいた人々の反発を買ったことなどから､意図した成果は得られなかったとみられます。そして、県庁移転後の明治 5 年に青森県は、官有地の扱いになっていたこれら海岸部の土地を払い下げ、これをきっかけに海岸部の開発が始まります。しかも、現在残っている断片的な記録によれば､藩政時代から名前が知られる有力な商人層に土地が払い下げられたという事例が少ないという特徴があります（表参照）。

表　浜町北側地所の払い下げ（明治 5 年）

地所	広さ		払下人		地所	広さ		払下人	
	表口	裏行				表口	裏行		
第 1 号	16 間	25 間	片谷惣三郎	弘前東長町	第 15 号	10 間	25 間	今井清四郎	青森町
第 2 号	5 間 1 尺	25 間	田澤市太郎	青森町	第 16 号	10 間	25 間	伊東善五郎	青森町
第 3 号	10 間	25 間	大嶋太三郎	青森町	第 17 号	—	—	伊東善五郎	青森町
第 4 号	10 間	25 間	桂儀助	青森町	第 18 号	10 間	25 間	鎌田五市	青森町
第 5 号	9 間	25 間	桂儀助	青森町	第 19 号	10 間	25 間	中村喜平	—
第 6 号	10 間	25 間	大柳福蔵	青森町	第 20 号	10 間	25 間	和田利八	青森町
第 7 号	10 間	25 間	加賀谷丑蔵	青森町	第 21 号	10 間	25 間	川野和助	青森町
第 8 号	10 間	25 間	佐藤治郎右衛門	青森町	第 22 号	10 間	25 間	伊藤三次郎	青森町
第 9 号	10 間	25 間	小浜治右衛門	青森町	第 23 号	5 間	25 間	桂井吉郎右衛門	青森町
第 10 号	10 間	25 間	和田七五郎	青森町	第 24 号	7 間	25 間	柏屋勇吉	青森町
第 11 号	5 間	25 間	三上伝三郎	青森町	第 25 号	10 間	25 間	堀井吉右衛門	青森町
第 12 号	10 間	25 間	三上留吉	青森町	第 26 号	10 間	25 間	浅田理助	青森町
第 13 号	13 間	25 間	桜庭多吉	青森町	第 27 号	10 間	25 間	山内文次郎	青森町
第 14 号	5 間	25 間	藤林四郎兵衛	青森町					

〔注〕第 7 号「加賀屋丑蔵」は「加賀屋寅蔵」の誤ヵ。
〔出典〕『青森市沿革史』明治 5 年 4 月 25 日条から作成。

海岸部の開発に着手した背景には、当時の青森町で新たに開発可能な土地は、海岸部のほかは新町の農耕地以外になかったことがあげられます。そして、これに加えて、北海道への渡航地としてこれまで以上にその位置づけが高まっていた青森を、近代の港町として再編成しようと考えられていたのかもしれません。

こうして、海岸部の景観は一変することになりました。さらに、その後の開発によって海岸部は変化を続けます。ですから、現在は藩政時代の海岸部を偲ぶことはできません。また、最近でも新中央埠頭が整備されたことは記憶に新しいところでしょう。海岸部は時期による景観の変化がとくに大きく、地図でその変遷をたどってみるのもまた面白いと思います。

ところで、新中央埠頭が整備されたことで、冒頭に紹介した聖徳公園内にある、「海の記念日発祥の地」などのモニュメントの一部が場所を移動したのですが、お気づきでしたか？

現在地に移る前の聖徳公園
（昭和 55 年、市広報広聴課蔵）

青い森公園東側へ移った聖徳公園
（平成 22 年撮影）

工事中の聖徳公園
（平成 24 年撮影）